

No.39 パブロ・レイノソ「ジャガイモを収穫する人」

Pablo Reinoso

北川フラムさんのコラム / 1997 (平成9) 年 12月15日付 立川市市報記事より

この若芽のようなブロンズの作品は、片方がスプーンの形状になっていて、そこには水抜きの穴があいている。この作品についてレイノソは「父が亡くなる時に飲ませた水、はじめて子どもに水を飲ませた時、それはスプーンを使ってだった。親から子へとつながる生命の連続と、植物の成長は二重写しになる」と述べている。

ファーレ立川の後、病後の薬の失敗で死の向こう側を見て以来、彼の作品はガラリと変わって薄い布切れのような美しいものになった。作風がガラリと変わる作家があるが、彼の場合はまた特別だった。ちなみに、再来年のジバンシーの香水びんは彼のデザインになるらしい。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

液体を移すためには窪んだ所に集めなければなりません。

匙は、食物を口へと運ぶために、人間が初めて作った器具です。それは母の胸にとって変わるものです。

匙はまた、東洋の文明と同様に西洋文明にも属する器具です。有史以前すでに、例えばファラオのエジプト、古代ギリシャ、孔子の中国において存在していました。

匙は常に人間と旅を共にするものであり、アーティストはしばしば口を装飾し、彫り、独特なものとしてきました。

原産地のアメリカからヨーロッパまでの<じゃがいも>の旅をあらわすイメージを作る必要にかられたとき、匙のテーマは私の仕事にくっきりと浮かび上がってきました。

こうして<ジャガイモを収穫する人>は生まれました。

東京のアートフロントギャラリーが、私にファーレ立川に参加するように声をかけてくれたとき、一本の匙を送ることが自然に思われました。

<テクノロジー万能>の時代に、人は誰でも食べ物を必要としているという事を思い起こすことは有用でしょう。ものを食べるという単純な行為は私たちが、芸術的活動のように精神的な活動を展開するために、必要不可欠な唯一の事です。

自らが彫刻したこの匙に、私はまた同時に、私の子供に初めて食物を与えた事、死の床にある父に最後の食べ物を与えた事への素朴な讃歌を見るのです。